

巻 頭 言

南九州大学人間発達学部
学部長 中 瀬 昌 之

子ども教育学科は、人間発達に関わる専門家として地域の核となり「人の育ちと地域の育ち」を支援し活躍できる専門家「新・せんせい」の養成を目指して、2010年4月にスタートした。

2021年4月からは、「新・せんせい」をバージョンアップした「子どもスペシャリスト」の養成を目指すことにした。「新・せんせい」の概念を再認識した上で、単に教育や保育の専門家になるだけではなく、地域共同体の再生の核として活躍できる人材として「子どもスペシャリスト」と名付けた。この「子どもスペシャリスト」養成のために、教育プログラムなどの整備に取り組みながら、教育・研究に努めている。

この教育プログラムのなかでも、“協働”と“往還”のキーワードは極めて重要な教育の一つである。大学と地域が力を合わせて学生教育に取り組む“協働”、大学と地域とを学生が行き来することで実践的な学びを可能にする“往還”、この二つの取組みを通して実践的な力量形成を図っている。学生は、保育施設や学校はもちろん、放課後子ども教室、福祉施設等の地域に出かけ、子どもにかかわる体験活動に取り組む。この学生の体験活動を快く地域は受け入れ、親切丁寧な指導をしていただく。その指導を受けて、子どもにかかわることの楽しさや指導・支援する喜びを学生は味わう。そのことが動機付けとなって、体験活動に対してさらに積極的になるという好循環が機能する。しかも、その体験活動を単位として認める「子ども支援地域活動」のカリキュラムへの位置づけは、その取組みを促す要因となっている。このような体験活動を通して習得する経験知と大学の授業で習得する科学知を融合させて「子どもスペシャリスト」の養成を目指している。

さて、2013年3月に初めての卒業生を送り出し、今までに9期生526名の学生を地域社会に輩出している。近年、卒業生の地域での活躍の様子を耳にする機会が増えてきた。そのたびに、本学科の教育成果を確認するとともに、教育のやりがいを感じる瞬間を得ている。その一方で、教育の質の保証はもちろん、合理的な配慮に基づいた学生教育、そして本地域における本学の役割の明確化など解決しなければならない課題もある。都城市・三股町・曽於市などの地域と連携を図りながら、この課題解決に取り組んでいきたい。

本書には、日々の教育実践や研究の成果が報告されている。関係者の方々の忌憚のないご意見やご感想を頂けると幸いです。